

―ラジオ用シナリオ―

## 📻 ロビタやロビタ 📻

多谷 昇太

〔登場人物（とロボット）〕

ロビタ：（年令不詳）家事一般小間使いロボット

主人：（40位）男性。ロビタの主人

マサト：（25位）七夕に現れた幻の（？）青年

ミキ：（23位）マサトの恋人

ナレーター：（30位）女性

M（テーマミュージック）

ナレーター「時は2050年、東京は下町に建つマンションの一室で、小間使いロボットのロビタ君がいそがしげに立ち働いています。限りなく人間に近く、二本足歩行など当たりまえの最新型ロボットと比べれば、いまだ車輪で動きまわり、小型でずんどうの、頭部もプラスチック・ドーム型でしかないロビタなどは、遠の昔にお払い箱になっていいはずの代物、旧型ロボットでしかありませんでした。しかるにこの主人始め少なからぬ数の人々が、最新型ロボット、

もしくはヒューマノイドなど求めずに、このロビタ型ロボットを購入しては親しげに使っています……それにはわけがありました。実はこのロビタ、ロボットのくせにちっともロボットらしくないのです。インプットされたプログラムゆえとはとても思えない、思いやりや、やさしさや、気づかいに充ちていて、それでいながら時に云い返したりも、すねてもみせる……そんなロボットらしからぬところが、もうすっかりAIコンピュータに制御されていて、無味乾燥で機能本位な社会に住む人々にとっては魅力だった……どころか、ハッキリとひとつの救いなのでした。さて、そんなロビタ君の生活ぶりをちよつと覗いてみましょう。今日は七夕でロビタ君のご主人はなぜか朝からそわそわとしています。ロビタ君の心中……いや、もとい、コンピュータ頭脳の中で彼が、あるいは彼女が？なにを思っているのか、ロビタ君自身のモノローグとして皆様にお聞かせしましょうね。では……」

M（ミュージック）ブリッジとして

主人「ロビタ！食事をつくっておくれ」  
ロビタ「はい、ご主人様」

主人「ロビタ、掃除をしなさい」

主人「はい、ご主人様」

ロビタ(M)『ピー(心中で?常時発するロビタの声)、  
今日も今日とてまめまめしく働くわれロビタ。我が  
頭脳、コンピュータにプログラムされしメモリ、  
家事一般メイド役としての諸事もろろで充たされ  
たり。それと関わりもなき空事のたぐい、これいっ  
さい、われの関するものにあらず。しかるに……』  
ミキ「マサト、マサトはどこなの?あなたはどこにい  
るの?」

マサト「ミキ、どこだ。きみはどこに行ってしまった  
んだ?ミキ、きみに会いたい……」

ロビタ『ピー、この人間と思しき一対の声、七夕なる  
今日の朝よりしきりに我が頭脳にひびきわたる。こ  
れなんぞや?仕組まれたるプログラムゆえとは思え  
ず。いずれ我がご主人様のテレビ鑑賞などの折り、  
はからずも記憶したるものか。定かならずも耳に憂  
ざたきこと甚だし。我が勤めの邪魔すな……』

主人「ロビタや、ちよつと出かけてくる」  
ロビタ「はい、ご主人様、お出かけですね。行ってら  
っしゃいませ。お帰りは何時ごろに?」

主人「そうだなあ、何時になるか……今晚はこれから

七夕のお見合いパーティだ。うまく相手が見つけれ  
ば遅くなるし……ふられればすぐに帰って来るよ」

ロビタ「さようでございますか。よい御首尾を。お帰  
りまでに掃除を終え、夜食等もろもろをしつらえて  
おきます」

主人「ああ、ありがとう。じゃ行ってくるよ」

ロビタ「あ、ちよつと。ネクタイが曲がっています…

…これでよしと。さあ、ご主人様、はりきって!」

主人「おいおい、よせよ。日の丸なんかふるなよ。い  
つたいどっからそんなもの取り出したんだ?……こ  
れで何回目のお見合いだと思っている、すぐに戻つ  
てくるさ。じゃあな」

主人の出て行く音。ドアの開閉、靴音等。

ロビタ(M)『ピー、ご主人お出かけせり(ため息)哀  
れなるかな、ご主人の独身生活実に久しかり。思う  
にあのご面相、鼻大きく、目鼻立ちのバランスくず  
れたること、また太りし身体ともども、われロボッ  
トの目からしても美しからず。いずれ今夜もまたふ  
られなむ。なぐさめの言葉なりとも考えおくべし。  
さて仕事なるぞ。われロビタの優秀なること、証明

せばや。ピー』

ロビタの立ち働く音もろもろ。

ミキ「マサト、やっと会えた!……もう、わたしを離さないで!」

マサト「ミキ、会えた……会えたね……もう離すものか、絶対に!」

ロビタ(M)『ピー、なんぞや。またしても起こりくるこの男女二人の声。室内に生体の存すること、わがセンサーに感知せず。ラジオ・テレビ等すべての機械もわが制御のもとにあり。すればこの男女一対の声の生起理由いかにも定かならず。はた心靈現象なるかや?……こ、怖からずや。ピー』

ミキ「うれしい」

ロビタ『う、うれしい?ピー』

ミキ「マサト……もうずっと、それこそ永遠に近い時間を離れ離れでいた気がする。マサト……あなたは、どこに行っていたの!?(泣く)」

マサト「わからない、ぼくも。なにかに、どこかに埋没していたような気がする……記憶が戻らないんだ……泣かないで、ミキ」

ロビタ『ピ、ピー。くわばら、くわばら。これは一大事、わがコンピュータにウイルスなど侵入せしものか。このままではわが務めをなし得ず。一度スキャンの要これあり。活動を停止し、ただちにウイルススキャンを、か、開始するーっ!』

電源を落とすような音。続いてスキャンとおぼしき適当な電子音の数々。

ナレーター「まあ、ロビタ君ったらロボットのくせにお化けがこわいんですかね。動きを停止してウイルススキャンに入ってしまった。ご主人様ご帰宅までに時間が間に合うのかな?さてそれにしてもロビタ君のコンピュータ頭脳に発生する男女二人の声はなんでしょう?ずいぶん長い間別れ別れになっていた二人が再会したような、切実な感激が伝わって来ます。日常の用事にかまけ切ったロビタ君のありようとはずいぶんな差ですね。でもひよっとしてこの差が、切実さと凡庸の差が、このドラマのテーマ、主題なのかも知れませんよ。おっと、ロビタ君のスキャンが終わったようです。さあ、声は消えたかな?……」

電源が入るような電子音、活動を再開するような適当な電子音。

ロビタ『ピー、ピー、ピー、さてもスキャン完了。結果、いっさいのウイルス感知せず。わずかに音・光センサー回路に数ヘルツの異常数値ありしが、スキヤンのち直ちに修正せり。さても、時を失ったるぞ。ご主人様帰宅までにアレとコレをーっ!』

ロビタの立ち働く音。

ミキ「マサト、ここはいつたいたいどこなのか？」

ロビタ『ピッ?』

マサト「さあ、どこだろう。どこかの広い谷あいに見えるみたいだが、しかしなんと美しいところだろう」

ロビタ『ピッ、ピッ、ピッ、ま、またしても声が!』

ミキ「ほんとうに。それに見て、マサト。あの美しい夕日を。まるでこの世の、最後の夕日みたいね」

マサト「ああ……本当にきれいだ。最後の……夕日」

ロビタ『はた、われ狂せるにあらずや?あなかま、ロボットの気が狂うものか、そも気のあるものか。し

かるにこの現象をいかに計算してみても解明しかねる。いまは声のみか、この男女二人の云う谷間なる光景までもが、わがモニターに映り来たれり。げにも美しき光景、谷間なりき。そは彼のジョン・マーチン描きし、幸福の谷のアーサー王とエグレ、のごとし。かく云えるは家事執事ロボットとしての、わが教養のメモリーによるもの……あなかま、傲慢などしている場合か。それよりも、このうるわしの谷間にさきほどらいの男女二人、こつぜんと現れ来たれたり。こやマサトとミキなるべし!』

マサト「ミキ、感じないか?ここは、この谷間は、おそらく、場だ。現実の風景ではない」

ミキ「場って……どういうこと?」

マサト「きみとぼくの場合、二人だけの。ぼくたちは……そうだ、だんだんと記憶が戻って来た。ミキ、ぼくたちはカシオペア50年頃に地上に住んでいたんだ。核戦争が起こつて……人類は死滅した」

ミキ「ああ、そうだ! (悲鳴に近い泣き声) マサト、私たち二人だけが生き残つて、そして……」

マサト「そして、ぼくたちは決断した。このまま死んで別れ別れになる前に結婚しよう、いっしょになろうって。そしてその結婚とは……」



ジョン・マーチン画「幸福の谷のアーサー王とエグレ」

ミキ「そうよ、マサト、私たちは猿田博士にお願いしたのだったわ。わたしたちの他にもう一人、地上に生き残って、地球上のいろいろな生物を残そうとし

ていた方……」

マサト「ぼくたちの意識をコンピュータに取り込んでもらって、その中で二人は融合しようよ、いっしょになるうと……そう決めたんだったね。だけど博士は先に亡くなってしまった」

ミキ「だから私たちロビタに頼んで……」

ロビタ『ピー！いまなんと？……なんと云われた?!このロビタに頼まれたとは、いかなることか。そもカシオペア50年とはいつのことなりや。わがメモリにさ年号は存せず、世界のいかなる国にもあらぬべし。奇怪なるかなこの二人、まこと奇怪……いや、悉皆理解不能なり。ピー』

ミキ「ロビタ……あのかわいらしかったロボット。いま何しているのかしら。ねえ、マサト、まだロビタは残っていると思う?地球上にたつたひとりで」

マサト「わからない。人間は死に絶えただろうし……ぼくたちが入ったコンピュータを守ってくれているかどうか。だいいち……」

ミキ「だいいち……なに?」

マサト「はたしてぼくたちはコンピュータの中でいっしょになれたのだろうか。あの瞬間、二人の意識を取り込んでもらった瞬間は、確かに君を確認した。

いまこうしているようにこの手で君を抱きしめ、願いがかなえられたことを喜んだんだ」

ミキ「ああ、そうだったわ！あの時はうれしかったわねえ、マサト。これでいつまでもいつしよになれたって……」

マサト「ところがそのあとの記憶がまったくないんだ。

ミキ、きみはあるかい？」

ミキ「わからない、私も……ただ、あのあと想像もでないような長い年月がたった気がする。ズーと冬眠していたような、それでいてどこかで働いてもいたような、一人として」

マサト「それだ！ぼくもそうなんだ。きみとぼくがまったくとつになつてしまい、ぜんぜん別の何かになつてしまつて、人々の中で動きまわり、働いてもいたような……」

ミキ「ねえ、マサト、いまはいつたい何年かしら？あのあと人類はまた復活したのかしら？」

マサト「うーむ、わからないよ。想像もできないな。ぼくたちが生きていたのは地球年代45億1234万5678年、略式年代カシオペア50年だった。

あれから何年が過ぎ去つたのか……」

ロビタ『ピー！待たれよ、いま計算し申し上げる（コ

ンピュータが計算するような電子音）ピー、解答。

地球年令アバウト46億年として、そはいまから8

千765万4322年前のことなりき。ピ、ピ、ピ、

ピツ！そもおかしからざるや？ご兩人。かかる大昔

に人はまだおらずして、オーストラロピテクスだに

おらざりき。さらば当時において核戦争など起こる

べきものか。ピー、奇怪、悉皆、不可解、不理解な

りき。せ、説明されよ、ご兩人。ご……』

ミキ「私もわからないわ。千年も万年もたったような気がする」

ロビタ『ピー、だから8千765万4322年前と：

…ピツ』

マサト「もうどうでもいいさ、そんなこと。ぼくたちが二人でいられなくなつてしまい、二人の記憶もなくなつて、ぜんぜん別個の誰かになつてしまうなんて……こんなこと残酷だ！猿田博士はこうなることをわかつていたのか？だつたら許せないな」

ミキ「まさか……でも、ひよつとしたら……あの私たちの仲をうらやましがつていたし、もしかしたら意地悪をして？」

ロビタ『ピー、猿田？さきほども承りしがその名はわがご主人と同名なり。主人ならば決してそのような

方では……あなかま、8千765万4322年前に  
主人の居るものか。ピー』

マサト「……うーん、いや違うな。そんなつまらない  
動機でこんなことをする人じゃない。しかしわから  
なかったということもないはずだ。ミキ、ぼくたち  
がこうなつたのには、どうも博士の、なにがしか深  
慮があつたのに違いないよ」

ミキ「深慮つて、どんな深慮よ」

マサト「ミキ、あの人は想像もつかないような天才科  
学者だった。同時に歴史家で思索家でもあつた。熱  
核破滅戦争という愚を、二度と人類に起こさせない  
ようにするには……などと図つたかも知れない」

ミキ「何よ、それ。どういふこと?とところでマサト、  
どこかに腰おろしましよ。立つてると疲れるわ」

マサト「ああ、そうしようか。どこかに岩でもないか  
な」

ロビタ『ピー、腰掛けとな?もつともなり。このよう  
なロココ調の長椅子などあるべきものを』

ミキ「あら、マサト、見て!びっくり。いきなり長椅  
子があらわれたわ。それもないそうじゃれた長椅子  
が」

マサト「あ、ほんとだ。驚いたな」

ミキ「うーん、待てよ……ひよつとして……ちよつと、  
誰かさん、ついでにテーブルと、なにか飲み物がほ  
しいわ。それにおつまみも」

ロビタ『出さぬべしやは。われ家事・小間使いロボッ  
トなり。わが優秀のほどくとお見せつかまつるべ  
し。わが主人宅にはあるべくもなきカッシーナの、  
このテーブルなど』

ミキ「わつ、テーブルがあらわれた」

ロビタ『続いてこれも。主人宅では見たこともなきシ  
ヤルルマーニユの白ワインを、リーデルのグラスを  
二つ添えて』

マサト「い、いいね、いいね。これはいい。まるで魔  
法だ。ミキ、さつそく座つていただけよう」

ミキ「ええ、マサト。ちよつと誰かさん、おつまみは?」  
ロビタ『ま、待たれよ。いま調理中、いや思索中なり  
せば。うーん、さればフルーツグロツサリー、キャ

ビア、トリユフなどお出いたします。ワラ』  
マサト、ミキ「わー、最高!!いったきまーす!!」  
ロビタ『ピー、ワラ、どうぞ。われにても嬉しからざ

るや。これ家事ロボットとしての本懐なり……など  
と云うにしもあらず。はからずも二人への親しみ、  
いとど増しくるが不思議なり。そればかりか慈しみ

の思いさえ湧き出づればなおのこと。久しく離れ離れでいたりしこと、また一人として合体せしのちも、長きにわたり人々に尽くせしとや、これあつぱれなり！褒め、慈しまざるや。われロビタ、なおも尽くし尽くさむ。さよう、次は食事のすすむ音楽など、お聞かせもうさばや。ピー』

### M…弦楽四重奏、ビバルディ「四季」第一楽章。

ミキ「うーん、なにこれ？すってき！聞いたこともないような音楽。昔の曲かしら」

マサト「知らないね。ぼくたちの居た時はもっぱらA1ロボット演奏家たちの、自律神経賦活をうながす電子音楽ばかりだった。ぼくはあまり好きじゃなかったけど、この曲はいいね。自然に心がはずむ。なにより食欲がわくよ。もつと料理出ないかな」

ロビタ『こ、心得たりイ。はて、なんとはなし、不思議の思ひす。ミキの思ひの移り来たるがごとし……：か、かなしや、マサト。いかに長く、食せざりしものか。いかにか食べたからむ。とく馳走をばせむ』  
ロビタ、ミキ「マサト、かわいそうに。食べることもできなかつたわね。いますぐ、食事つくるわね」

マサト「え？ミキ、なんだった？このワインやご馳走、君が出したのかい？それに……：なんかいまの声、変わったな」

ミキ「そう？わたし知らない。あなたのことを思うと、たまらなくなつて……：結婚したんだからわたし、あなたの妻でしょ？それなのに食事ひとつつくとあげられなくなつて。ごめんさいね、マサト」

マサト「そんなこと、仕方ないさ。それよりこの魔法の数々、いったい誰がしてくれてるんだらう？……：わ、ほらさつそくご馳走が出た。おいしそうだな、なんだろ、このいつぱいの料理の数々」

ロビタ『ピー、ワラ。牛バターナッツかぼちやのクリームポタージュ、アナゴとフォウグラのポーピエツト、それに牛ヒレ肉のステーキ赤ワイン煮、蝦夷アワビと車海老のポワレトマト味、そしてデザートはキヤラメルシヨコラのガトーとアプリコニラのソルベなり。ただ思うだけでそく出で来たれば、もう……：いかようにも！ご兩人の思し召すままなり。マサト、ミキ、さあ、どんどん食さるべし。ピー、ピー。日の丸の旗など振らばや』

ミキ「マサト、わたし……：誰だかわかるような気がする。この魔法の使い手。でもいまはいいわ。それよ



り、さあ、どんどん食べて。なんとたつて8千765万4322年ぶりの食事よ(軽笑)」

マサト「えー?なんだか変だな、きみ。でも確かに猛烈にお腹がすいてる。さー、いただくぞ!ミキ、きみも食えよ、さあ」

ミキ「そうね。じゃいただくわね、ロビタ」

マサト、ロビタ「え?!ロビタ?」

M…再び弦楽四重奏、ビバルディ「四季」第一楽章。

マサト「ふう、食べた、食べた。もう、入らない」

ミキ「たーべたわねえ、マサト。私も女を忘れて食べまくってしまったわ(軽笑) 自分、いや、私たちへのご褒美として」

マサト「え?なんだつて?ぼくたちへの褒美?」

ミキ「そうよ、マサト。魔法の主はあの子よ」

マサト「あの子つて……」

ミキ「ロ、ビ、タ。ロボットのロビタよ」

マサト「ま、まさか……なんでロビタが。それになんで……そんなことがわかるの!」

ミキ「さっき……さぞやあなたが、お腹がすいてるだろうって思った瞬間、一瞬でロビタと共有したの。」

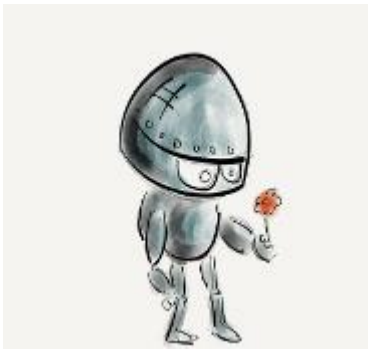
マサト……わたしたちはいま、ロビタの中にいるのよ。この美しい風景も、提供された食べものも、私たち二人も、みんなロビタの頭脳、コンピュータの中よ。あなたがさつき云つてた場とはそのこと」

マサト「ああ、そうかあ……わかった。ぼくたちの意識が移植されたのは、ロビタのコンピュータだったのか。しかし誰がそんなことを……」

ミキ「だから、もちろんそれは……」

マサト「猿田博士か!」

(以下続く)



ロビタです…